土佐日注解　乾

へ 5
4472
1

京ゝ迷日さ程遠き三条寺町の
邊にゝあ紀なる人の風雅子
以てく興ゆ御茶仰のしさいも
なし諸任吾道て北帰る店振
日ゟよめあまたの千代を棒子の本
さんすて甥ふ玉を流しよしとして
やふて又紀又名紀日ちこそ紙
庵しも稔ひと北館からの人

門 へ 5
號 4472
1

昭和十一年十二月十七日 購求

しかしあまたゝびにもおよ
ばずふしのまた絶ゆるまで
海士の小舟了せ松にては
ひらせぬのうちもあるもあり
ええて高津の宮に年経
ぼる甘泉山の跡浪速津の
よしあしも併く入て納のみち
深く探りて深き事かぎり

あるは詩の文質をこえる歌
の花実をふかく此明暗をた
しなす此道の名家とはなる
盛衰の理をしやかの山
うちの書籍に入るは通ひぬべき
といはれしとも無数あらしと
見るは撰えいとまなく日の
みしの絶学を守りてあまそし

於北海雪中に　画賛釈無名序

寛政八年丙辰初冬

自序

はかなきを好むわれの法をしたしむかしの
一茶坊か茶話乃ちなみを思ひて君子の交りを
うちかしこ紀中に生れ故郷乃七部をとりて庵
をむすひし形をたちならへ冬は炭のぬくもり俳諧
ものこし連句にあそひて山の井の流涼しく
て俳諧の筆をおこし一句乃法乃すたらぬ山の
しくみをやしなひ日々を過すのみさらに此を區と

可以尋古しく可解しも読者乃説
此はこの乃那久波まつ也此句乃附て
詠し句能く味ひ此の中字と不学ぶ人乎
空しく思ふ葉律く夜半の蛙燈の遠に字門
作者ふたたび刻しに挿したものを能く
後葉に形見を遺して津多へん翁乃朽葉
乃枝本能く集め記小冊子ふ辞と不しら
為九古哉巫女中に埋む為めにかなし

書林道たるもいつしくの書林某某が郡に
于その道は我よく見出しさりとも不憐
難に郡尋てし年世し乃ふも然
此者古はらしもそも何かまくとのこの者をも不
見なんと浦の名をとって者又流行し人多
見えてた道のはるかにゆる者極あり
蕉其道をたとへつ人ふ多んとなむ足
くらし花業みての何れのたにゆるし

ゆさ熱てちしと亮そ多ふいつれとも幼
おほ原をいろにせむ時俳諧ひつ
不幸なし千死後乃みな朝安く逝以す
丘ゆることをかしきは既に甚てりをを
ころふ在千人活てむすのち浪迷乃
岸至ぬしみ於禁下かゝる糸裏山の安
ゐし升六古ふ書きとし

凡例

一 此書ハ予か門葉初心の輩の為にしるしてこれを
述ふをまたゝふのみとなしよりこれを一覧
敢て文章ならすしかれハ
一 文字の丁寧をもなるへきを漏しやすきを
偏てせよ
一 書中已か言をもなしてはしく過当
なしと予か門葉のために記して世にあり
披きなハ猶よくなし

冬の日注解乾

浪花　黄華庵升六著

笠は長途の雨にほころび帋衣はとまりとまりのあらしにもめたり侘つくしたるわび人我さへあはれにおぼえける　むかし狂哥の才士此国にたどりし事を不図おもひ出て申侍る

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉　芭蕉

此句貞享元年甲子の冬に赴きての吟也　一説道にて吟不定

てハ唯しよて文於風雅之文て須者ハ冬の句なりとい題号ハ
とくにのこ鉄砲を用ひてい意句は冬の句とは限す
も是より出たりとも云此説にてもとこ一説冬乃題目の事なれ
ともなし此眼を味ひてもあれは是よりして此表題出たりと
ありことの語り謂へり 蕉老の古紙撰も是を自し証すて
此紙ハ余情張筆をも発し題し冬の日と云題号もあれ
より出たりと有りされとの説いりてはなくてや見人たのし
作者て用ひへし此所にも数多解ありとも数多なれは異な
平にもとてくさまるなり 抑々たる冬の日一
部の俳諧ハ皆てして冬季のことさまさまとて冬の日
と題号なるへし 或人難して曰一部の題号何
そさるたて年とさるあれんや 汝の説のことくあらん歟

此の発句よりてこそしとも題すへしならし 又冬の日
三季よりてすれは其の句乃題とはせて風情ならへし
とらふ巻回まても是れなりしと云ふは其一偶をのみとりて冬
の一称よりてすれ古来より既題を一部の趣標と云ふはさるや
例せは妙法蓮華経ても是なへしとの此を述へしてれハ冬
一体よりてすれ此一部の俳諧巻頭ハ初雪の
それ炭うり霜月にて冬のさるしとの題するかハらかに
すなれ冬乃日とも云みて至くなりて一部を通して有る事なるほ
題を一部の趣標しとて本意をあるさき何そ題する狂句
のよれをとくて題となしあらんや余冬の題目の趣よりいそ
たりとさもいかなくてや考へ 翁は清世の謠遠の人なり
然らは何らの紙をとりて題となし与んそ 何なるべしや

冬の日と云ハ公の論ありて師翁の題と定られされハ冬の一巻
の俳諧なれバこそ一紀一巻に定られて冬の日と題せる歟
尚し○句解 此句ハ予が家業の漂泊をひつかけて旅するさまを
業の体なり 似たるものを報して作り立てたる句なり 竹斎ハ山城
国の医生にして睨ゝ介と云る僕一人を従して京を漂泊
し洛に居かねて名古屋へ居住して医を業とされども世ま
わりきまる少なく云ひかけ天下一庸医竹斎と號りければとて
狂哥ニ扁鵲も耆婆も及ばぬ竹斎を志て病家ハ恐ろしかり
竹斎が狂哥也とあり ○狂句二字の事 或人の解ニ曰 狂句の二字を
句の頭にして只風の才覚を嗜する人ありしを其の頃の風調哉
志きるものか 初語の余意なれハ此時代の風調なれハ狂句風の
と句を読ベしと解して翁のその句をあれ

牡丹蘂ふかく分出る蜂の名残哉
また我獨りして盥ひつゝ夕哉
手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

是らは之句を引て狂句の二字を句の上へ入りよみ論ぜしと
解するなり 此解用ひがたし その引出の牡丹蘂ふかく或ハ
また世を那引して手にとらば消んの二句 初語の余意なる
ことのハ全く句の上へ用ひて是哉除く時ハ句意わかれ今
此句乃てハ是ハ狂句の二字を除くとも一句ハ風の才覚を
以て見えてある謂もなき事なり 此二字を句中に入て読べく
句の用ありや 此句に混じて前の二句をもて論ずべくして是を
此の風調と云ふを志てさて云ふの事は読まぬ事にて即て愚
なりまるし 是ほどにも悉く文字の余意なる事に知らねハ一句

文字の余りなるとの差にて筆入れし又蕉翁七部撰す狂句
の二字或ル人予に其の日一部の意味いかゝやら予中ゆへくと問て答曰是
狂を古人は詩文詞書にも狂客の才士と作りそれより今の
俳諧に於ては専用ゆれいてより是ぞ古今の先達も狂客を
我も狂句をもつて風人ぢやと云ふすてもなん謙退のこゝろにて
意のよみきくともつり此解ん能かし体し其おほ語をとみ家
りきいうり其まゝ人たる人をもいゝしれされとも古人言之は謙退
まて狂句の才士とはゆされさりまれとも自分の発句を斉
句とはいづけ狂句とよれよ謙退して己が宗とする道を曲て
狂句と申侍りし翁其らは楽ぬずれ〳〵是ら古今の流を以て正
風とも無し正る言中なるにいふ不謙退なれいとして云は
を作りて彼う譲る道理ある人まやまとし掠狂句の二字

を憲とふてハ詩格に狂詩あり歌に狂歌あれと俳諧
連歌に狂句あつてやハともあれ〳〵狂歌士の作意を嫌ひし
てこれハ不用として此発句の傍に作意なく一句狂しされいと云を
其狂句とハ点取ものゝ句となりしたるもの是ハいふに放して書く
時は前句も子細の作意まし夕礼とも云ふ我書候ゆへ翁乃
ものの好くされとも狂句の二字ハ句に去りされ狂句とおもふに名き
を剥ぬるにぬかれし名れハ書つけたるとその物好とねらひて後より
狂句の二字を除て作るも作りしと是ぞ俳諧より翁の
後程ありハ門人等狂句の二字を除て宗とせしたる作り七部
撰する翁遷化の後門人等狂句の二字を除て宗とせし
又両ふしとも云ふり尤まるへし然る発句中に去るをつけて
狂句なるへしのとこ云正風ハなおもいふへき本つらし此やまされ

然して此二字を一句となしたる事ハゆゑなくはあるべからず
いはゞ○次に浮世の中に当時天下の作者を求んとして
再三て浮世をあらんものなし仍て先ッ其浮世の当を我
去らされハむかしよりも祖業にあれとも此ハ故翁の生涯に
浮世中の一物くらべ此句なりて今少く加へし求人の説に浮世
の中の雅ハ助語として其と物のありし翁の文字式ニ外の十体
を出して雅ハ助となりてなかりしかハりんは持たりん事浮世
の説あるへし都ての浮世みなその誹りてそのまゝ成りたる
そのまゝ細かにて其より見えて只一句てらへ見るにあり
落葉せし落葉あらはゆへ亦と仍て物よく言ひはへて
其のころあらそとあらはれ来りて見たるゝハとあらはれハ江
うつし西行歌に我ものと秋の梢をあらはしたる

伊成に我ものとも聴れを我のなくて落葉せぬ事なれは
浮世とハみて其を小松の里に家居して又と下の
句にて右の時に一葉落葉すれは忽ちとあるに是体傳又
あらしさる弾く泪のなかなかとりてまた落葉あらし
下の句に又いひなしとして名所にとてちとりて落
葉十句の後句にて春の水とたなくにて只あらは鬼貫
此句らしくならぬれハとまてる其のいかにくにて只あるを
其行成して然ものの雪翁あれは又句落葉して春の
咲に梅のちらちりひく雅やかの春色のおもかし
此句を秋の水となる時ハ落葉なるさゆへてそのまゝあり
さくても浮世の中の当時の説を異にあらし或人雛
しも白き心に似かよりてこそも赤く入にあらはしても来る

なし是も手をとつてうつさんとせしやさはその当時を
きくんとせし哉しらしく之武ハ乃りとて流しさるのとうちを
句ぞ顕はれくし弥とて其て通り親友の余らを世々くらす
光陰迅くもあしらつるれと数息しつる者ニ手ニ旅茶の拵
用をもてきたるべきを浮弥子か浮弥の前を哉きをしく作りその
ゆへにはるゝこれを浮弥の口伝之今翁の句抄てきく竹式の
風雅も何ゝるを笠を其述のふかゝ子縫ひ弟子いこそはりく其ん
かつしにこそありけり風の方ちとてらへりと上ってゞ亦遮らなしく
外にの次千何ゝるを我さへなのきれあつてとの新身へるときへ句
落ちんしを性子とちふくるき手も弥とて以ゝる千楼中源治乃
余らもこも形之其をもうとその数ましるゝ千ゑ三新見る物きら
ゆへ子余ちてとこれこれ弥の用をきるへし其门の流るゝ

すや此句を浮弥の手本とはすへきと

たちやとおもへしふうさの山茶花　野水

此頃式人の行に論ツやと書ふくしけるとしよむゐりはじめ之
しるらむ時は水るのうかるゝやかにてもゆかれはあるへし
さればも都て句を吟するは濁るさとの了濁りを流くへく
よむはかれとも濁りありてとの不二濁り哉除く嗜する法やい
あり既旧本子濁りを赤流へなるは此句のよこれ綴るりしき故
あり其は点をりとげりるとよもへし叔句こそを哉句
の竹之字何ゝる人を論しとけり哉子山茶花の新其の
たゝるを立つらちを是るようにこそあらし其き安しくもちりつ
日称人は訛を以ゝる称と唐げしれを流意の勝語こそ
あれは老人あつて読述作を俗語手又ゞ作く有子氏とばく氏云

なり一定詞に誤りし又脚速に并来なく歩行くさ返を繋
くすれども以て是らハ略ハヒフヘホの通韻にして其によまを付る
ゆゑなるを云ふなるべし 亦ヒハヲ反セハヒトなどの類に列元なる
と云に其わけ隔りてよむ事何の子細もなく句とするべし

有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮

此句主水と云を人倫とみて数句の竹杖に奔越し是ハ
こまるも数されまして其之ニ出るふ吟味之天和貞享の比
までハ翁もいまだ俳諧の定も作り時なれハ猶未だ定りて無
乃日来の日杯の花を七部のうちにも読まる事わり無なき
その句しきこるに見れハ官名とさるハ酒屋のと云ふ主水を
いふ人にみることありやなし 或人此説を難して曰主水と云
へいまだし人倫なる名を非人倫とみる事負門の拗き之翁ハ

俳諧に故人なしと看破して人を古式を用ひさることへハ
も人倫なれども人倫之句続キされハ指合なしといふかな主水を
人倫とみて指る説も所ときも其之を打の場なれハ人倫之
句つきてハなしかられ蕉門に古式を用ひたるとある事少なく
なし 俳諧の式去嫌ひ等ハ皆貞徳を用るの法く翁既
故人を用ひて蕉門に去嫌の書ハ一巻もなし 去嫌ハ之見
傘を用ひずして俳諧に故人なしと云て蕉門一流の是を
他門に於ての是を用ひんやさればこれ使ふに向て論するハ
とんでもされてまた此俳諧をとり他の二門に對して公の沙汰なれ
まさに官名を非人倫と云ハんにたれの人か用ひずといはんや
勿論此第三主水を他の事にして其人なし次に有明の法
きて曼説匿なり或ハ三主水星とも云ひ或ハ茴字之事也といふ

是新んを杢んの異説之用ゐるゝれ又の説ゟ当所ハさく
身をおもん斗りの料くとても何り此説給ふ字ゆれきも味
理哉なされ共くあるれ身をさき上きは又も何され
此当所を云水の名ニ一封しきてうりよく京おしられ
作者の初子母ゑ当所と云うるゝ此五文字高妙ニして一句
なけも言くあらし任さく傍の性ニ身三を教ふるも当所の詞
よく居りける故ニ　附て云嵯峨山葉の風粉人様の当
行とふ酒屋なるへし

かしら乃霧を烟るふ何のむま　重五

此志るを見て酒屋の何りを行るゝるゝ人ハ作者の骨折
哉ちるれと云へし此るハ前句の酒屋ニ語意を附よりと氣
さまえ情を烟るふト云詞ニ前韻を体めてんよく渡るなる

するくるのてもし宮ニ故人の骨折り句ニ魂を入るゝなる事之
しまを示すとまてるハ前句のうつろふして責も一句ニ
寂何り

朝鮮のほそり葉乃白ひなさ　杜國

並ぞ見るの行北辺の葉之と解するも何れをもさん然哉
酒屋何れなき場とありてわつりよろしれなハ前句のくるの風ふ
とかを然しての霧の立あり子葉を附る所のたしくく
一句ニ場なるし朝鮮すされハ世の辞花と白ひなきハなく
すけなきと云之旭ニ霧白ハ色ニ而ふ林まく見てし

日のちりくニ那りハ米を刈　正平

此句稲刈さしナくきを米も刈るを作りなる也をかし
是るハ是の風俗と米を刈ると一句わして作りかるものなり

米とりし後ハ藁もかりとられ秋と此頃もはやまゝ是説
なれども挙て益なし然されハ畢竟此説ハ其句の芭蕉の心
なひたれとそれより翁ハ秋も央なりてとりて茶を刈と仰ける
ほとり茶を刈と云を詠されしもの句のちからくらべ作るなるべし
わび居ハ誹諧にやとられあるらんて　野水
此句庵の荒たる体をよくいひ出せる句の味ひよく見ゆ
寂しさ実に妙にして閑静限りなし是を有のまゝ作りたるなり
俳諧の文章なるか其きれ々にみえ其を誹諧の味ひとはいへ
のまゝに作りてハ文章なるにて風情あらし作者のなきものにてあらん
もと俳諧とは蕉門とも云ならん俳士のうちも俳諧ハ俗談平話を心とせ
のこひをわするゝ俗談平話を正さんハ為にとふ所ならず
するも我朝のみなもとにて此所のもふ所にこゝろ得て其川を

風雅ハ文章のみにしてかならず我事さるものにはあらず飯支
考の十論に文章を謗してつらぬ花の千米なるもなほしと以る
字の外ならしとて尽くと百枚書送るとも人の心の難
ましきを浅茅が宿とも思ひ雲井のよ伝に都をひそかて
といへるを詠じたる所に乃あやし浅茅も雲井も何の用かあり
やと云ならばやといふハ何そのそ刈文章と云べき
為く蕉門の俳諧此誹る者代すとも云句乃文章にいふなひも
味ふべし　附といふ寂しき庵に住る人の情思ふべきもの
また此句を破居の寂をつける其のまゝに其うきを眺
望したる附たり扨此句の当り千年の陰宗静なる住
居せぬ其のかくハ世の風人にして我学者も俳諧をする人も
その響を刈るよりそ人で農民の辛苦をおもひやりて

日のちりくと夕陽と共の為も侘もやうて化のさかさ骨哉
猝さ腑(アブラ)をきりて身に私を天下の遊民とおもていとつらき
を楽を喰ふよと数をかしる余を頼りなれともの哉し

髪をやむまま我も身の身のかと　芭蕉

此句を世の前の家の不浄なるを捨くたてて身をきよのむ
下かい宮主人の庵に立ちて作者もろを見て盗賊還
俗の体をあらはしたれもんみ変化の甚き実に仮聖
ともしし　扨是を自の句としてその淋しき庵子すむ人
大方いもろし世句既我庵いト呼うけるに譲物力乃答を
ころよ還俗もんと千る人に対して其庵を其あふるよ我
不もとも其の人をかくすに体にして髪をやすとあるを思ひする
と附たれる其の身の理ぐんをり見ふあるへし

いつわりのはらしと気をまぎらすて　重五

髪を前句の髪をやる人を尼と見なして附たる其の女は恩
ひ妻わかして深く契りける人すまた女知り其の婦と添く
て其のれ久しく別れむつみつらん所却て其男の為ふれ
あて仲立する人招き偽りするされて之を許こともひして辛く
髪を薙られともその実は偽りをとすて今は口惜しとて気を
もまぎらすらん　去るは実の比丘尼のいとはなく
し実の比丘尼と見ては蕉風の意を失ふなるべし

きさるねそしらかりけすこしくさるく　荷兮

気をまぎらす様をいはゆる様子を失ひたる人と見て附たる
句なり誠にうく涙ながら辛き様と云意深し一読人をして
愁殺せしむるべきなるや

影法の暁さむく火を焼て　芭蕉

庵ちかりの翁と呼れたる隠くれ亭翁僧めといふ宮にて楼たゝる彷彿たるさま我も味ふべし寒くの詞にてよく
との云使を白りをいふ影法のくろき墨子也

あるじはひんにたえし虚家　杜國

此句前句の影法はなりける人の代国都して世にあるに
五十年あまりて九十九髪の老翁を凌かん料に火を焚
かれはさすがにあはれなり

田中なるこまんが柳落るころ　荷兮

前を今釈の附て柳落るとは前句の虚家にして小まんが柳を
句作なるん田中なるの手子をいふ田中なりと云詞に二アヲ
反セ八十とあれば之小まんが柳を伊勢の山田のあたりに浮となし

ならひありと云八七段楼に謡りて舟を引ひし

霧にふね引人はちんばか　野水

柳に水辺を附て霧なるに舟引人の跛(チンバ)のごとく見
ゆらゆらとあり前二三句われる沈みたる一句をかへりて作り
たりける

たそかれを横に眺むる月ほそし　杜國

是は伸し句に横に眺むる月を三日月なるべし

隣さかしき町に下り居る　重五

さかしきを譲りしさへサハヲ反セハサトなれば之句意をさとる所
或は近き小謡なきのさる住居の遠くなる体を月細しと云
よりさびしさ侘住と附たり

二の尼に近衛の花のさかりきく　野水

前句の所に下り居る人を常に居る人とハ前の句は都にて奉仕
致する人の其所を引て己が方に立帰り居るを以て居ると云
なり又五日三日の暇を乞ひて帰るをも下り居ると云ふ或ハ君
下り里なりにて不出仕にて父入と云に同し又は下さるゝなる人
ありし御位をすべりたまへるを院（ヲリヰ）の君と称しなつかしまつり
付ては所々にあり居るといふ人を御所つとめ致せる人といふに
されば人情を附たる二の居るは一篇二篇ならずして其の居るに
ありて下り居るの使しさを頻りに語りて奉仕人のむかし
を語り出し近侍の花の盛りいかにおのれ奉仕の折
なりしも花見の御遊ありとおもひ出さるゝに今は法を示
娯楽の差なきを見侍るは我歎息したるさまを余情の句
なれ道ある其の歌しうて是例し其上多かるべし

蛛何と音をなにと鳴秋の風　芭蕉

此句を或人の請ひて此訣を聞く人を発句の旨をしるさんとなす
人とあらずして身を蛛に擬へ喩へしての附くと為して之比
喩の句例は

八重山吹き二十あまりさし
見るさへしく梅子乃　時

致を引て詳なり此解者さんとす発句に人まことに
先ず越したる所にあり居る人といふ句一つをとあみてみるに
蓑をは腰に用ゐし人に見て蛛の薄きて衰へて侍るに
して発句と問答の附く此様の差別なく源氏の末
摘花の世の中をかれ出ていく御前を此に見られの飾りに
なき人今帰り後まで送の数ひも追く小身を居りき御居ると

蓮も花ちるころ一葉の鉢を函に入ひあらはれたるてし
附るハ蕉白乃人のはりし花し哉まつりしてそれに近て
しかれハ後々に叶ひりくしも光けれ一清原も花し
のはるる八名く初りて花鳥果りしをあらを挽りかで除を
蓮にとりりにて遠ハ詮て訣くむとしるる世の塞哉
人きる五言の諷詠をもなるへきや訣くむトハ詮るに
して源氏に風考りに核はり

のりおりに隠透郡おおろふ系　重五

是れ前白の人ありて一生人の位を定めて際ハ蓮と参ふりるの
相のこゝろねいを上着の付るとみて付られ隠すし
とふ子一生人物をもきくし然るる訣くむ法きうを
自をたゝん

今そしらみの矢哉まはる声　荷兮

蕉白隠すし郡おふろうりトの文段を歩答めて此作者ニ
ハ一曲をとふきて椒をかよりすゝし伺ふ人はらんとみん
附りさる　り　ゝ蒼に附りうりの変化を扱ひて秦乃
孫譲をうる君の仇を報ゐん為に出さ為く妬を投くるす
つけ総ひしともろなし或ハ韓信にかのまはれる侠者
の木くれ子為ひ居て秦の始皇乃車に鉄椎をうち放て
ハ附とも趣向をとて蕉白系物の中なる人の不あろてを
隠子くとふより密々に恐ひねしふ無こその付りとみん定て
今そしらみの矢を放つトハ作りさる人けふ子一隻の章を
引るて作者の俤とさへし様の作者なる変化に入哉
用ゆへしとそ

ぬしなき人の記念の松乃吹おれて　芭蕉

矢を放つといふより吹おれたるとして発句の趣を写す
せられし翁人の記念の松をそこらの京氣にして二句の
うつりをさんなくきく

志らし宗祇の名をつけし水　杜國

是も発句のさけしきをも静かに招ひさる熊坂が語
然れは美濃にあり宗祇の水も同じ玉なれとも遠
き熊坂か物見の松と風流なる宗祇の志れ水との対句なる
へし宗祇乃水は美濃玉郡上郡山田庄宗谷川のほとり
にありト七郡樓ありかし故にうれぬ譲りて略し拙此句の
賞するに孔子家語に逝者(ユクモノ)はかくのことき夜を捨(ステ)
ましたるに基(モトツキ)し善悪の熊坂も風流の宗祇も今はて

名のこゝと生者必滅の理を借としける作者の心きくへき
程なりしそれ

笠ぬきて無理にもぬれん北時雨　荷兮

此句は宗祇の志水を去りて不家枕称を思ひよそし附くるん
そこに作しそれは来(キヽ)との句ひと笠ぬきてとは宗祇の句なり
世の中をふるもさらにしくれの宿りかなとよみたれは志て風流を
したふして無理にも濡れんとは云なるへし

冬かれをわけてひとり唐苣　野水

是は冬季なるにちなみて無理にも濡れんといふ句に
冬かれの中にひとり唐苣の青くと眼さらかなと句の
うつりとして附たり　拙此場の論にあつては越の宗祇水
をさして翁人の松に對して嘆の句なれは此唐苣に生論は

なかりしや初心の迷ひもはれまたとりてさらに猶り
見えしと詠れしきは人の骨ヶ何　杜國
見られるより聞けるの誤し記憶を附たり
烏賊ハ文字の玉子の魂のさ　重五
是は芭蕉翁と詠れし人の骨ヶ何として有るをいく
夜も嘆じ給ひて人に晒骨累として野も限りなきを
心の骨を折り給へと覚えて古戦場なりと
見付られし　古文古戦場賦ニ浩々乎平砂無垠夐不見
人抔ありて東西の心も定まらず果もしれざる広き所ニ
出て人の骨をもみれば誠に我が身へきよみのはく
なりて只忙然としていかにもせんすべなく只杯をえさ成
下りてゆき悩ミたる旅人の体を詠られし芭蕉の骨を何と

其詞の疑ひに人の骨をさへまいの甲にもや烏賊なれば胡国の占と
ともさへなれしといへる等の手にやいふべし扨いづれきん
何をとても占を定めん杯踏迷ふ折も未だ知らずとりく
詠後しておぼくなれる体なるべし　古のかり素盞烏
尊我玉を棄んとして小嚢（サハヘナス）郭補一千を引辛して
大和国の玉にて一千の力を抜として竜とならず天照大神
詠我中しめしてよりしおきてふ不思議しらん八百万神達
を引たれてかへりきや天の岩戸にあともなき時世界暗
く岩闇となりて日月の光りもなくされば落子路根笥をを
疑とさ香久山の鹿乃肩骨を捨ずけるいくなりてしと占兆
おすま合鹿木を焼て其鹿の骨乃割さまをもてうらなふ哉
事もなれに読をとけて諷しらて出きもなくしとなり

香久山の麓に爰の下に石解て肩抜麻をまうたる亀を示
亀卜といへるは亀の甲をたいし裏より火をつけ
ひゞ破の三つあるを離の卦ほかは震の卦と易道に
用ゐたるを竹に云に南亀乃卜組子をきたる
いふをもきりぬ身の内の吉凶をしれり鳥
銭占やいはすの国のつれづれもいふにもやきしれ
右まつ作さの謎にもとけし　郭公　野水
是占ト謎トの對句なるべし附ぐさは其のむつかしきを謎
扨て執なりし日待庚申まちなどの戯をおもひよせ附
たらん
秋乃夜一斗のみつくす長哉　芭蕉
これ漏刻と對句を謎ものにして扨乃秋夜をよんで秋
夜の時節を附たりまたを長き夜と云ふしての秋水一斗
とうふ字を捨たりさも杜園が夜中滴一斗の雫なり
詩人は長夜の手書ともいへり夫を是曲節乃手本
とも紹搬もいへり
日東の李白が坊に月をみん　重五
秋水一斗といへる漢語の風流子日東の李白とつけく
詩人をのみいふよすなり日東なる李白家俳諧なるへし
南郭詩集に日本の名を東と寄する時に是を我説に
石川丈山の事と云へも是名をは伝ぬと其子名を定
不時なき狭くてわりしかもしれぬ李白なるてふ詩の好き
人ありとみえし
巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮

是ハ前句の李白か坊に月见しある人を附たる儒家詩人
なりよハ題を延し其体ある人の世に多く作ハ此李白か
ことき詩人の眉ぬけたる人に亦は坊に寺より月见る朋
友も其雅なる人なるへしとその人の形容を云てく中に
木槿とハ作りなりてしたつ文槿花一日栄とはかれたる槿を
出しをく中にみさしれさむさの人乃今気にをもんかきと　脈に
ならて山茶花とかれに云て今中に木槿のにもかて離る
見てとも程乃山茶花ハ竒を好みてきし狭くをるにハ出る
すかこをしの咲落し其に散りてるなれハ此木槿に
混して論すへからす

うしの跡とふらふ草乃夕くれハ　芭蕉

此句或人の解に古言に大人をうしと云と是を大人乃

弔ひて題字の法よりおこり琵琶法師の寺集りてこれを附たる
そのことを一ツ語あり用ひてしさハ牛を仮名にてかへて
我幸にて前句に牛の出たれハあきゆへ大人と己か猪手に仮
なて解きたるものなるへし一座にて大人の弔ひには其
乃多くれと其の一字納まるを前句ハ琵琶法の職人なり
吏を琵琶法師といふに见へしいかる事にかいとふれハ乃るく
まこと云れ前句の琵琶うちる中に木槿を挿みて深き乃
景をもてやまさる気象一曲せしむる人なれハいはれけるか
杜甫が老人の風流にも似たるそのうへ牛の跡きをおもふし
てる杖乃のこらめて云手題句をとふらて牛とハ附けたるん
みそ牛さへ歩みもされ夕ての前と思ひ見ゆる大ハ例に
前のきの舟にして木槿の白ひろりあわれなる弔とハ句作

あはれうしなふの夕くれには牛を葬らるゝ在家の信し
さ於侍りて此世は憐の祖との尊しき所よりや起向
をとふけ玉へるらしこれ亦大和物語に南院の七郎君牛を
借りて坐りて又の日かりにやりたれハ是牛死にきと云ひ言
我家しるをさうしとや此ハ是天子に従ひし家の命を
かゝる所よりやよそも今なお耕なれ

萁に鯰乃魚哉いくさ　蛇人　杜國

此句あはれさの人乃為に牛弔ふにたりとを瀟灑きあく奥商人の
とゝへりそれのよふにして又子附のちりくるなしとゝ申よ
いてしと去れ此変して商人の是阿乃作と八ハへんとぬくと此ハ本
んをと用ひて解いり入きるのにして是おそらくは其商人
乃手なるに於ハおしとて是ハさくるを思ひあるにいわり弔なる

となせはかりの哀しと諷しける祖をしもあはれ乃ゆゑに尤
近しといふさいにつのよしはりて上総房州の浦々ハ海辺
かきてハ乃漁人とその僧にその施すよろしとぞきこえて尉
たゝふ孫猟に生魚をとらん供養するにこれをも是に乃く
向丸裁を二見浦の市担ふ子出しにいなくの代に新たに所化
乃名號といふを取られ示ち院堂舎の供養をもさせきさる
ふて魚子戒名記して布施とあれはきさるものに是わたり
の寺院みちに門乃塀哉を染担ふ子おすりしてあくなるへその
所に彼生魚子戒名書しつうちつけ去をなしにみえいは僧
まく者とさらんいかなるにおもしき業なれハなかしにいはむ
故是をとりて是をを解するにおか句の牛の弔と於ける二見浦
辺の辻堂担ふ郷中の牛乃獲腫担ふして於ける言ひ失せ

なるに年忌祭の弔ひをなさんとて其わざ乃後人にもしのれ
しめんとて假佛躰像の営みをなさまほしき事を附するなるべし
牧して其薬を少しはかりて花より以て其木六作りたらん 牛子愛ひ
侍さして坊子の死せるに其実多き中に其ひとつをを談ス
近衛泰山公殿下の御作に木幡の里乃出ありし中に牛乃病
つきて坊中より死せるものありしをすれはさ此に百姓を救
きはなるに殿下の御身をいり不便に思しめし彼所の百姓
をめして其所に氏神祭の坊やしなる神をその祀るを定
めさ給ひ村のうちなる子柳の明神と申して小き社乃結ぶよしや
よるにをたまし其を拾ひて御家一を下されて銭かの社に
納めくしとて其侍家 坊乃なすある乃柳の神なる社を寄する
をかしけれはさしめや其後社に寺乃を明ゐ勤して奉るの

翌日病乃牛もも皆以のことく起立ありしとぞいひつたへけれ 此
世にはまうれは其牛の年四とろんて供具の佛を附るなん
かし

かゝいの神をはさきてさ又星乃あかすもかふく 荷兮

古く白き女のらしくト以に詞を誉めて古そ女の物お尋ば
さこへてるさ此人をうつしてあらはし肩に杵を持すれはて
この紫くらい女業をあらはすをるへし小京女八瀬をんなる
と坊ろゝは穀て縁女も宗祇或は儀くもの影ひさらきて
かしらにいたゞくさ作者云に手なるをさなとして押出しな
女とは何より 此鏡(ワキシ)をコノシロトいふは昔ひとりの美貌(ミメ)よき
娘を持てるに其女の容色世に類ひなし国守乃
ひまひて妻のとをひやと仰せけれはのさりなくは彼翁此

よしを娘に告ぐるにいかなる事にや娘随ひざりしかれば翁諫めつ
さまざまして其の咎をおそれ其娘も死失せりとて棺を
作り其中に鋺をいれて那辺に送り一時の悔りとおもし
より人鋺く事わひ志かれば国中誠なりとおもひして止みし
ときよりして鋺（ワナシ）をコノシロといふとぞコノシロは子代の意
なりとぞ　室八島縁記有　古歌に下野や室の八島に立つ烟り誰か
子の代に鋺焼くらん　或人難じて曰ハく子といふは女と附けるは
さもあるべし夫を子といふは如何　答へて言ふ子の代とは
立る詞の縁に子をいへると附けて聞ゆ　其上子をいへる
神の生贄となるなれば夫をも数へいれたるも然るべき
暇なく
手ならいもとの古句に名所の今ゆ変　野水

或人の解に昔の女の妹と娚は子をもちらんとて天子に献てん為
妹くに妹もさきに郭も子ちて眉ををき子ゆゑに附くかくと
いかり生きるも思ひしよし言添へてあれこそまことにあるべけれ
言葉は一字一向に解きぬく此附けこそ娚も妹も面白し御座に
宮仕へして居る体ときれ中も娚も年も十八九才ばかり
いと小さくあるかれ君の御経を身に宿（ヤト）して妹の寵を
集めんと子をいへるに妹も年も十四五才にていまだ世に
慣れず何事もなく眉書にゆきさとは知らんとかなしるる
御局様お抱えに招きて非蔵人の者まであれは妹は生
身の出事にして眉書子ゆくを娚の身にかかる妹の眉書
にゆるし也子を生む女は附けるに此二句の連ねにあふ何事なく
あらんかとて候へし

猿ひく人居湯子志賀の茶瀧て　杜國

眉書にゆくとより湯屋へ附て扱眉作りて地下平人
の業ならねハこそ猿の幕を引出てさればや志賀
のあるじハにてふを送りてわりしろくとしてわのうふ
猿引うつわかニをゑやひろるさまも能見えてし

廊下ハ茶のかけつくりなり　重五

廊下の先きに茶の湯をひらひてまたを離つゞくに作り
光ちる夜のりのゆかでつかる風情いと目出たし　峯白のる
峯白ハ頌の意とたとへ近古の席なりとも峯白ハ張く云ふ
すみての君ひくを附侍　昔し称名院殿二七月の近衛殿に紹巴
披露ありて自ひの茶乃座にてさるを書て消え年月
月に添ひて峯白　今にありしものゝぬ云菓にきくれとぞ

致ての通の庭にても是限りなくて佳翁こそ手なれよろしれ
藤く茶屋の手おをも佳舞時も家の様相にモフたるべ
またトふたらかれ名づけたれト詠への庭やらふかぶ見
とくやつる

あとくとも壮年いまてとおふもを

振りた

去門雪のおくらしも移りきるへつる　野水

おとのごとく振衣千仞岡濯足萬里流とふらひのまうれ秋
津浦の送くを経めぐり名跡古迹を遍歴して泉石を
我子狛家子ならけ入月ろくてむ子経懐を述て生涯を楽

早稲田大学図書

さるらんと年くれ経ても五斗米のためよ足を縛られて
今ならさるを果されし官禄を投うつるをいさぎよしとして去
りしの高き操をつらぬくといへども余念を晴らす
発句に切字のことは読み説く人の惑ひにかかれ
候ひをも切字なきにて発句とならぬと頼みに思ひて
切字の入りたるをも押て切字をのんとして却て句意を
損ふことのあるはありとて当時も大抵言ひをほうけれ
先人のかくもいへる切字の口伝をもちてましもすれは
新式ニ切字のことハ初心を助る為なれハ宗匠の情ここ
まかせ候ひしとあり　先発句ハ混沌の間より太極
の一気の動き出すれハ陰陽の分るる所発句ニ
切字を用る時物二ツとなれハ[illegible]天地陰陽となる

なき切字を用る時は物に対して其心の意を　切字なく
いふハ発句の世にかるるゆゑに切字を用ゐて一句とはなるを
なれハ身を又かかる時ハ治定すれハ大ゐに頼ると思ふ人
もあつる発句のすみしとなれハ其初心の学ハ一句の意
あることをしらぬ人も切字を用ゐて句をなしたりと切字の徳
として発句の治まる所をなす切字を用るハ一
といふも切字といふは畢竟初心の指標なるべし
惟然曰切ハ節也竹ハ節ある故に延るものなり切ハ節の事
しるして亦曰切字ハ君臣に忠あり父子に孝あり朋友に
信あるも其ところにあらすとも此まかにあらすとも
よく切字にかなふ切ルといふも言ハ[illegible]
夫婦の別といふも性に切て切れぬ切字をの発句に

然して切字を入させ給ふ　秋風にあはれ淋しき桑の杖　翁
此句ハ松倉嵐蘭が追悼の句也亦當帰よりあはれハ
塚のすみれ草　翁　此句ハ出羽の呂丸が旅中に死せるを
悼める句也解に當帰を當に帰るへしの意にして古園
にも帰らんとするを待ちこゝろも帰らんとひつゝんにけり
塚にすみれ草の句鎖りにして帰りたる体の語勢なり
これに切字を用ひさせ給ハヽ此世の事縁なれバこゝを
切らさせ給ハ故翁の徹意也惟に切字なくとも平句にならざる也
是等を肩に当る女郎　是ハ平句也　名月や竹にさゝむる
村荘　其角　此句ハ始めハ名月をトして附句なりし角是ハ
発句にならざるへしとて切字を入て名月やとせし実に雄き
発句となりける　初鶴纐纈集に五つある内の白雲の松風

仙花　名月を竹にさしたる村屋　是ハ附句なれども一躰
句のすがたハ発句也亦発句なれども一躰附すかたなれバ平句なり
ありこれすがたの平句なりとさもあれハ如何に切字を入れしとも
発句にハならぬ也○切字の口伝　切字のなきハ一句浅く発句
にならずハ切字ハなくても口伝切字なくても
発句なるものハ発句也切字ありても平句なるものハ平句なり
其意ハ切字と云ふ者ハ初心の為めにとある字ハいつも切るゝ也
切る文字なくてもいかにも切る所ハ切るとあらんの切るゝ所に文字
を入る哉切字とハされバ先翁曰いろは四十八字皆切字なく
とも申されたり亦切字惟になりてもいかの切れぬ発句あ
まさなりてきれぬへし許すの一句の位によりて発句となる
こそされバ切字の有無にかゝはらずとも連歌

本式傳ニ切字を格字とあれハ切字のなきハまことの句
切字ハ発句の格なれハ必あるへし若切字なきときハ
発句らしからぬ句の見えるまゝ能く弁へきなりて翁の言ニ
格に入りて格中に居るハ狹し格外に出るハ法なき
格を入りて格外に出へし

一云ねはりやすさ見ん者也　蕣乃食　杜國
発句苦世を厭へる者なれハ是非なきを歩行して一生余情
をうつして稲と其名ふかき飯臭のおもしと雲ニ移りそ我あ
まれは見ん事なりて飯臭の食ハ仕官の暇なきさ身ハ朝
露をもたすして蕣の咲をも見んさりき食咲かぬとおもさて
さて発句体の手書を見る事なし　和ニ角ノ蒭蛍ノ句ヲ
蕣にさかハ見へし咲かぬ男と那もし翁付句ハ一生角ノ大

酒気宗旨をいはしその正さる句なりとその見さゝのさ係あ
さらふ合すへし

　　秋の葉まで落る蝶の羽おもしろ　　芭蕉

此身ニもと庭ニ蝶あそひて秋なるにおもひ来る蝶としてく前句
雲にて発句と云ふなり是秋乃体を季となりて付る
にあり一句の味ひを蝶いそしく其前いひたる花の初め
よりおもしろく其枯る蝶の羽ぞおもしろく秋生まれのこゝろ
蝶の打あそひて少とも活をもつて春の末飯にも手野
菊まてをも見ん有るこゝろなきさるしとはいへるくまふ
へし

　　うつろふ花をくるまひきなり　　荷兮

此句目をて一轉して御幸車と作りて発句の蝶咲も

かくれ乃なよしきゝ場を須州の里ともありけるよ
ちよきん鞨鼓にかけれトハ嘯なまなり白ききよにあれ
御遊ある九重の玉乃よそほりも草須さ州辺のあはれ
寿とをめてたまふ御幸なれとありなかれとうけたまハるを
退したまへし常光院殿不破乃関屋の
幸ありけるとき國司かつらかけて垣ほ板ひさし
らまありしかるをこえありしてころさゝの今めかさ
まゐらせんとて不興ありおかしけるまゝ御製ひら薄之
て月もそこもねぬ板びさしよく住なれし不破の関守

麻呂の月袖に鞨鼓をならさん　重五

花の色に車川とよりて遊人をさかしうつるハ院の嘯
描る夕くれをかけるを鶉の袖ゆり月さえすまて九りれ

遊びうたるまゐり麻呂ハ上古の男子の亦名ありけるにこそ
鞨鼓をこゑ合せよしとし白きき志けり遊子よろしきに
うたひしあやりをきくかれて月に鞨鼓を鳴らしても
かく秋乃かりの縫ひてささふを含む世常なるにまかりし
みし

桃花蔵ゐなる貞徳の冨　正平

きては一生の採掛りきの末さをあらして季かけり
季かつあとらちの待のするなり花の只月とのきたなき
月ハ常住なれとも花の盛をころ季さをかくしき乃栄
附きまゐ麻呂とるふちを行けのそゆき紫ゐきて袖の鞨鼓乃
風流なるとよりまた丸をはありなひかける尽し貞徳の
家とれは翁ハまさて予の家のかをゆかさしてくれそ花咲翁とも

いへる風雅乃道の古老なれは家に作りしてん志のうに
桃花を手折りして梅をもさしそへてもてはやしける挽を
詠し仙の志やうを飯せさせて三千代迄なるもはかなき
世をおのかれし貞徳乃長寿なるありさまは作なる名
し此翁は寿八十有余歳を於く（保）こと称されたる寿
ともに風雅なるも家の詞をもて在けるふりして辞世
露乃いのちはかなきころの玉なりけり ひろけぬ清
読あそれたる辞世 貞徳翁 承応二年没 春秋八十三才

雨こもる池水の田螺ありうへて　杜國

さうきは家より小より流る香の沼乃田螺をとりよせて庭
隣の泉水へ放つ美奈の体を伴ひりこひふそのすさ
も平生はさまりして井手の蛙をとりよせたるるも

嵯峨野の虫をとりよせなる川の数なるなるしなりり
へてとハ持麿はうりて囲ひ捨はしはなるはなり残せるさ乃
まうり砂を捨て捨はなるさ植ゑ纏陸をなし強し
おもしの名をとなりして囲ひおくるするなりまうりて価
のすさハをなりて浪花の市衛り出れうれなん大坂よ
り田舎へ捨と称するふとのなりちおもらに全くおりらへるなり
かくて閑なるへし

奥のきらさうきれをおくるとさふ法　野水

なさ田螺をとりて世をもてなれ人を伴うりはとささ
らそれのさむさそて流れてうち数くさはなりむかしち
今の錦入やうり乃稚をなりて衣を志のく補ふをて
ひとくの布のもなりとて裁をなし公乃時代よりて

作りなしたるに二百年乃足まねこそのかたときはへる
其上八重しくれにまねさしそうなり奥儀抄に曰正月を
乃とつなりしを此月はえうりて衣をかさねりきる
ところにてきさらきといへりさはひめの空に霞
乃こまねきしをめまゝきさりつけを此月なりける

床ふみて語るいひとなる男　荷兮

附句を前句のなく語りなく人を女と見なして前に
変化試招して意を附けたるの女を江戸乃吉原を
とに勤する仮辞とみて本つのむかしをかたりいひ出
し曲輪つとめの乃たのさま耳を語りなんとなりて白き
田舎乃客あり遠くて宵のあとのなかにはかさなく
しうちなるなれ孫やふけ人静まりての夢みたし

そうの庭をうちなかしろの男乃園をころをとせ
つきありしとうちかるれは実を従弟の男かりてそれなり
かるしといひとおりし

孫きやるけのうしろのところし　芭蕉

此意の附けさま面白し是を国更て注をならひ明し
付く也ろうとして六世なしそと翁のその好みに案の
外にて孫の妨けとなるなると子眼一統の場を発して附
られる翁の附句に教て此格なりきとなり續猿蓑集
附合に　紛米の小唄一さけ夢見すなく　馬莧　十四五ハかり
の余所なくおもふと　里圃　此附意て紛米の小唄なれはよく
そうて来りつるよと語もく附けたるんにちろつきなく
すてきるゝその孫おもしく今余にも出て来るにくとは

おもしろく老翁の物好なるべし是も一字拔にても其望
きん田舎の景にして傾城賣女とありけるは忌ゝ
ならずにしなかれは今遊君の末と成てありけり忽ち面を
赤らめいとく恥て雪の戯り松山の波をかけて末の約束
をもなして果は客の妻ともなるべく相定めして契り
つるに今は無もさる果を見ても此句ある共て縁の妨ケ
となりしを恨ありしとの作なるべし　扨人倫自
他の論ににりては此句しのまゝ恨みなくは自他なきに
して乃作も亦かくもて詠て人の覚ある句としてる
此句は田舎をうつして賣女を定としする人を此句の上にては自
にして意の句と作とを見しくはあるをもとるべし
口おもて瘤をちぎる地ならしかな　野水

此句は孫坊と云より此病なる旅人に懸りれなりとこそひとつて
是瘤をちぎるよへ附たるん云ふ此瘤をちぎるは例し人に
句の句より三句一つにして云絶なるべしきれとも手
誠を従来の男と化をさしされは即化の句とるなるとこの
瘤をちぎるは自の句にしても化の景となりても君子一字雖
を遁るべし
明りさくて秋に首送りさん　重五
此附は一轉して手死さん手男老の左も成附より一字
附さは一字張中に大将なる人の一戦すうち負て世乃
軍を必定手死と覚悟を極メされは此首を敵の手にて
渡さんとなにとつけてきるを秋なる死首の人を召し秋に剣
取られ大なる瘤の手なれは敵方の喉りを以ておもん首より

然大将ハ死者の尺若しくハ一度臭氣を退さんとおもふに
兜に薫木を焼きめる例もあれバ我腹のにほひあらバ
口惜やと附られん此諸事死のいさぎよきに腹をさし
く扱ひなれバ奥なり

小ちさなに盃とらせひとつ川つまし　芭蕉

是ハ他の句にして首途りせんとよみける意の酒をのまし
附たり小さなとハ從者子なり(きやくしや)これハ炭俵に坊主に
あれとやらん仁とは信じおきふに印しるべしひとつるはひとハ
義場子向して身を忘るゝ勇者と背中して忘るゝ事勁せさるに
ふぢをかるべし是ハ太閤記の柴田か討死にハ太平記の村上
彦四郎か討死の傍ありなむ合せんとおもへるにや

月まで迄の九牡丹ぬすむ人　杜國

是ハ是花を前にして風雅なる体を附たり或る酒香を
うばひ取るさまをいふ九他の牡丹を盗みにゆくにはあら
て吾秘蔵の牡丹を人に盗まれてまたなきたのしむ遊遊の
体ならの好事雅興なるべしされバ月ハ立ちのぼるやと
あらん是他の句にして酒香なるかな人を待と云ふ附
なるべし

縄あるく此かかりハ応いふに九度ある　重五

是ハさく牡丹の場を附たるなるべし古文愛蓮説に牡丹ハ
花之富貴者也とありて牡丹を富貴とも謂れバ牡丹
の場にて金殿玉楼とも作らんに是ハ何の手段一統を
以て是なるハなりし家を思ひ寄り跡ハ俳諧の文字ある
まで世の中の変化をとるべし

まつくとのこ比茶切　町　荷兮

およの堅藏垣破ける修居とてひしき町なれハ石垣の
さまおりしくまつくとらふみ見る様しき狹さへんくさく
初茄の世してや嫁のいつれもしを　杜國
見えて持茶切町を通る人を付て丈の中に見ゆる事の
眼ふるるをのを見んと出して付たり例ときひきさと集に入
込に諏訪の涌湯の中にありける其の辺の中に眼ふるるも
のを一人見出して中にもせいのたかき山伏を前付たれ
ハなふ見しかるへし　初花の世とハきたさころ嫁しつき
たる女にして五月頃の衣裳の茶やうなるをいつめしくよ
いふなるへし白きハ人もなけに裕ひ飾りておのか宝盛
を入て振舞姿きさうのくとりたを桃しまるへし

うち錦いろくるの素てゝられ中々をし　野水
付たるハ余所の娘のおとなしく嫁となりたるいつ方しきさ
る娘もいつれの素を見つきてさつれなのとく嫁となりてくく
ふくしゝやままんとく子をとるに親とおもハさもなりけんたるま
遠き月ありなるへし古きなるを近くハさたてにて女の子を
おふる身にはなりる老をいこすなし　素ハ小女の恵みをく
桐なるに餅すゆる掃の朝のうなり　荷兮
素とととよりの髪搔の宝と付たる桐葉鑄きかいハ少人て女の
前の宝をなかも似たる桜を女ハ珠さへに求しつくへきことの本伎
なりへし此句の賞するにハ季の栩ひ宝なとしろし前て
季ハこれるにに眼をぬやうにありて掃きのなれ作者の氣を
男ゆくきさうなりて此句ハ正月もえりうて二日比夜にして其の

かゝりしに其節かはるにさ多をとへるべし一句すらくと
して誹諧の上のありやなしや水鉄とくきさるゝらし
くらひたて起きと帰燭ともしてく　芭蕉
此発句の閨に飼室と附たりし孤蠅をとりてとかくるゝ飼室
まし更にして営を飼ひまくし喧きんと手にかはるゝ竈乃
外に火をとりしてゐる故歎きんてり故古く志られるたし
営其の時りとらんて夜の時さりとらへし餅を嚙むゆ舌
猪とるの肉よくのりて陽氣のめくるに方に古の人る々
るつよしとくかしのてく纔ともあるとに時をとへて餅
飼をと楽をとつれとを被九飼とてして至る飼をもの一件
え発句つの上其の句を承りて帰繕ゆとして之ゝ営外
嘩つる時分を附しれする了

篠ふかく梢は柿の蔕さびし　野水
此附季をうつりに発句の営を体ふかくて冬季を
附たり熟柿の自然とまちたる柿の蔕かなしとゆゑくこそ
淋しさもありぬべし
三線からん不破の関人　重五
此句は篠ふかく梢くの荒くなるさまより不破の関をとりあはせ
要なるべし不破の関は名のあしかれ上弾絶たれは琵琶と
もひめへ足にそふるを仍の物好して作る三味きんと由か
之く作りたり
道すがら美濃で打ける碁を忘る　芭蕉
此の発句の三味線借りしくも此人を去んで不見にしくる
あんらんよとあるへとと附しれぬるゝし句のてゝわか不破

乃翁にもあり杜に之味縁ありてあやしく獨り美濃にしも亦
其名をうつして杜ひに傳をまねハ又と杜も云ふうしと年く
跡しハし日本の高き人を何者にあらんにあるの人とハよんとまいらせ
とし云ふ人何名と近江る所もあられども只師のもと侍より
あんまるをとかめてふみ多くの不破の里にすめてあるよと
詩とよいひかけしてこ侍せん傍んとよこさまる子の杜もしられ
いふなくし其名を今ある日の人出しとこそしなる日住りにきん所
其の作ハらいハ何をも手柄のかりしきやうさくわこ侵をもよより
らく見ん出しにしんと世におりしられ

杜さかしくのさしてそ　七　十　社國

主へ墓をとふらふところより老人と詠まり白らこハ杜まあく
にむかしを思へかゝこのもおもはずまゐりてふるき時ハ年経

も性なりしみ久しハものゝすかたをうつしとりて杜も七十といふ
なるん杜の一字を傳きあり古今めでたふ止まりぬるものを年
よりふくしてしハいかく老めりなと亦酒債尋常往ゝ處

有人生七十古來稀す

奉加めたに浄堂ノ金うちうちいまとひ　重五

高き杜も七十といひてありうら慚愧をせしおもふにかりぬ
又て浄堂の其かたを儲ありこなたは堂の再興かなひにて老
ともの家もなくと金銀を拾ひて供養しけるをみるに
つけて我ハおもひし七十にもをひさわとにいまこそ後手のさ
杜をもてなりんまうかれ堂舎の達ことならんとも一段乃
供ならぬもさるにて慚殺萬くと疎まなくいふにもひとなる
さしなり後に居世ときせんとときにいかてかとも世ある

やゝかれゐの句をけり　業平の名に鶴ゆくいにしへにて守る
まてきのよりに思ひさりなるしまた蕉門の風雅は経の
名をあらちえれまて古く人を諷諫して仏の名をもたる
しりの傍をいふなるし今の世乃人は家をもらて詩を作り
俳諧をたのしむ漢乃禿不振に小子の経書の謂をも厭きまし
さの経なりなるつきれは珠数をかしもと手にとりし後の世
乃沙汰すれは文章にかゆるとんなく経の名をもとち
之れなる人を忘れし我後世を知る人をもとて風雅にし
て信しるは茶のきく　桃風雅といふは無常迅速をとき
之れとし後乃世のりんにかけるとて風雅といふ故
翁はかり初の発句も其のなかに翁の発句を解きんと
するに無常迅速を忘れてはほとんど句意を得るる能

はさるへし　偖まへく紫子源氏をの作物も一生障すると仏乃
名によりて書のうへは語るゆへを厭ん事はあるれや経の名を忘
まこらふへきよ

兎も川の傘乃下　笠ぬきまれ　荷兮

是は発句の全をまひする人の為なり句意は雨が降て
居るとの附なるへし　旅の其の人の志をかしさを

蓮池に語るの子拾ふ夕まぐれ　杜國

是は発句を夕ぐれと見て夏季を附たるか秋の句と
すらしと手つから落葉をすり　野水

是は此辺に紙漉と附より落葉ちらは世ともなる落葉紙の句
鏡りなるへし

月にたてる竹藪の影乃前に柿て　荷兮

是我俳人の落之茶臼手つくりともに云便なるべし扨此
職人にてはなくし其好法もなに故ならて遊徽る
ならしもなれんとも子作ちんを用ゐて茶臼とハ作られん
りしきん一ト入わりたる人物なるへし茶臼ト云ハ必鬢の
まくるまれハあいしくるく世ちる髪の油も用ひされ
まさにわかるん中華の人乃髪ハ只なるくまきよく
髻のところにゆをも載せてされわゆなてまれ
ならけ方髪之月ハ尾やくのうつりなるへし
意つきねきれつ臨済をまいり　芭蕉
茶臼を遍ト云ふハり中華の人物をよびよせて髪の糸
つれてトいふに老女をみゆ老女とよばれしとまたらね
砧ト作ルも誤ゑ語の所ふし　婆子焚菴之話則ニ老女禅那

に帰して陳済の僧をやしなひおきしに其僧の悟道を試んと
あるに小女をして僧にいだきつかせて即今一問曰
正當恁麼時如何　僧答曰枯木倚ニ寒巌ニ三冬無ニ暖氣
と時婆子徒ニ二十年来俗漢ヲ養ヒタリと僧を追拂ひ庵を
焚きりとぞ此老婆をも付られんかし

秋待のうしろ手なれきまくおろうさん　野水

けふも陳海を詩とよみ禅機をもて悟道の体なるへし
一休禅師の歌ニ闇の夜に鳴ぬからすの声きけハ生れぬ先
の父ぞ恋しき　是則無邑之声をきゝ声少に声をもき
きくといふ即悟道のさま也　禅語曰大海ニ降ル霜ヲ看ルヤ答曰
空蟬ノ声ヲ聞ンヤト云フハ即刹那生滅ニシテ生而即滅シ滅而即
生ス　生も生滅モ無始無終　性にかへりて見れはこの声と

生死なくのごとし　悟道所性の所なれや付たるへき

菱の実つゝむ露ありけり　重五

此句の頭まてさんとゆふをうち被て菱の実つゝむと二句一意に
て静かなる容を付たり無しとて此句手爾葉爾かゝる
附は二句一意なし

袂より硯をひらき山かげに　芭蕉

此は前句のしくに菱の実の露落るト二句一意に付たれは
其二句の場を定めて句となし樹下石上を栖として山川の
美景に千年の人を付たり　其山かけに寂然として
風静を楽しむ旅硯抔を取出して菱の実つゝむ露を
やみけるらん

ひとりは典侍の局か内侍か　杜國

此句山かげに硯をひらく体は旅人なれども袂より硯
をひらくと云詞みに侍ひ公乃旅人とは見へずまたを
杭哉は俳諧師御抔としては例の矛眼一硯あつてあらしか
旅人さればとて侍しき人ならずとも作るまじ依て爰に内裏
上﨟の旅なるらんとて其風俗のてあつけれは局か内侍かと
趣より見立たる事の口くに噂千万なるべし

三ケの花鸚鵡尾ながの鳥いくさ　重五

此句局か内侍かとあまたの女官並居る体なれは爰に禁
裏の鳥合をあしらふなり　紀事ニ曰禁裏清涼殿ノ南階
前ニ有リ闘雞ニ其ノ雞諸家中雲客被レ出レ之ヲ仙納弥市預リ
此事ニ決ス二勝負ヲ一

しらかみいさむ越の独活刈　荷兮

ミなもとは禁裏へ国々の産物を貢奉る儀を附られし越の
狩猟刈て貢き越すの熟語なるべし 是等はなれハ祝
ふにありて聖代のさまを附られしかといふさもいへ白
髪の老翁も悦びて貢を奉らんとなるべし 万民
聖徳に懐きたてまつりて目出たき御代とうたふべし

[illegible]